



「思春期」って何？

生徒たちにも繰り返し述べているとおり、私の教育信条は「子供たちの自立を支える」ことですが、「思春期」は、大人への自立と深く関わる時期であるといえます。

思春期前期は、14歳前後を指します。まさに、中学生の時期ということになります。

この時期の特徴は、「大人と同じではない」という価値観のもと、同世代の仲間との関係が重視されることにあるそうです。つまり、大人と関わることで自分が、仲間関係においては否定的な意味をもち、大人に相談したくないという心理が働くことになるようです。親がよく「小学校の頃はあんなに何でも話してくれたのに、中学生になったら何も話してくれない」と嘆く、いわゆる典型的な「反抗期」になるわけです。

思春期後期は、17歳前後であり、高校生の時期にあたります。この時期は、次第に「自分は自分、他者は他者」という感覚が育ち、自分と違う面をもつ他者を受け入れることが可能になります。

つまり、中学生の時期は、高校生になって「自分は自分」と言えるまでの過渡期。「自分とは何か」を模索する時期になるといえます。



一方、親の側からすると、前述のとおり「あの子は変わってしまった」「何を考えているか分からない」と不安になるものです。また、変わっていく子供を認めたくない場合には、「なかなか子離れができなくて」と、子供のご機嫌を取ったり、無理に話を合わせようと視線を下げすぎたりして、結果、子供に乗り越えられてしまうこともあります。

本人にとっても、親にとってもなかなか難しい時期が、この思春期前期なのだろうと思います。

しかし、思春期後期が、大海を航海する船の灯台のごとく、向かうべき場所を指し示してくれています。子供にとっては、「自分」を確立するための様々な体験が必要になってくるでしょうし、親にとっては、誰とでも相談しながら、我が子の自立を支え、「別の人格として」成長していくことを尊重していかなければならないのです。

自転車乗りを覚えるとき、補助輪を外すときのように、一人で歩み始めるのは、不安がつきまとうものです。口にはあまり出さなくても、内面の不安を感じ取り、支えてくれる人がいることで、大きな安心感を得ることがあると思います。「寄り添う」とは、そういったことなのかもしれません。

子供たちは、この大切な時期に何を身に付けていったらよいのか、親はどんな関わりができるのか、さらに考えていきたいと思います。